「読む」「書く」意欲を喚起する学習指導

～「ファンタジーの世界に入って，主人公にインタビューしよう『もうすぐ雨に』」より～

湯浅　明菜

本実践では，子どもの「読む」「書く」意欲を引き出す学習活動とするため，（1）副教材との重ね読み，（2）「主人公にインタビューをする」という書く活動，（3）「読むために書く」活動を設定した単元構成，以上３点に重点をおいた。

副教材との重ね読みをすることにより，２作品の共通点から，主教材だけでは気付きにくかった物語の構成に，自然と気付くことができた。

また，主人公にインタビューをするという活動は，「楽しんで書く」という点においては評価できるであろう。さらに，「質問」を考えながら，実は，「主人公はこう答えるだろう」と自分なりの答えを考えることとなっており，登場人物の気持ちに寄り添った読みをすることにもつながった。

キーワード：読む，書く，副教材，重ね読み

１．研究目的

読む活動では，読むための知識・技能を活用する場を保障したい。そこで，「読むために書く」「書くために読む」活動を意識している。教師が精選した箇所を視写したり，子どもが本文を自分なりに書き換えたりすることができるようにするなど，単元内に，子どもが読むために書く場を設定する。

世羅(2005)は，学習課題は，①学習者の学校生活や学習生活の場において，学習課題となりうるもの，②社会の求めるものや国語科の教科目標などに照らして，子どもに興味・関心をもってほしいと思うことから設定することができるとしている。

①の場合は，子どもたちにとって最も身近な生活の場のことであるので，興味・関心は高いと考えられる。②の場合は，子どもが興味・関心を持つように出合わせることができるように，学習課題を設定することになる。

よって，教科書教材のみならず，地域の民話や詩，俳句，平易な読み物など，多様な物を教材として扱うことで，問い続け，学び続けようとする子どもの姿が引き出されると考えた。

２．研究方法

本稿では，2017年度３年生における「ファンタジーの世界に入って，主人公にインタビューしよう『もうすぐ雨に』」（主教材「もうすぐ雨に」平成27年度版光村図書三上）の実践から考察する。

本実践では，子どもの「読む」「書く」意欲を引き出す学習活動とするため，(1)副教材との重ね読み，(2)「主人公にインタビューをする」という書く活動，(3)「読むために書く」活動を設定した単元構成，以上３点に重点をおいた。

２．１．副教材との重ね読み

「もうすぐ雨に」は，小学生である主人公の「ぼく」が，動物の言葉が分かるという体験をするファンタジー作品である。かえるを助けた際に聞こえたチリンという音をきっかけに，「ぼく」は，身近にいる生き物たちの声が聞こえるようになる。現実世界と非現実世界との境目は，かえるがぱちっとまばたきした瞬間に聞こえたチリンの音と，大雨でチリンという音が聞こえなくなっていく所に描かれている。

他のファンタジー作品と重ね読みをすることで，教材間の共通点からファンタジーの構成やおもしろさに気付くことができる。

本実践では，主教材「もうすぐ雨に」のほかに，副教材として「めっきらもっきらどおんどん」を選んだ。

この物語を副教材としたのは，次のような特徴があるからである。

①現実，非現実，現実の境目が分かりやすい。
②非現実に行くきっかけが題名にもなっているように，はっきりしている。
③おばけと出会うという設定と，登場するおばけのキャラクターが子どもたちの興味に合いそうである。
④文章量が「もうすぐ雨に」より多くなく，語句も難解ではなく，本学級の児童が自力で読むのに難しくないと考えられる。
⑤主人公の年齢は書かれていないが，子どもたちと同じくらいと見ることができる。
⑥物語の最後に，非現実にいくきっかけとなった歌を忘れてしまって，もう行けないという状況が描かれている。

これらの特徴をもつ「めっきらもっきらどおんどん」と「もうすぐ雨に」を比べたとき，ファンタジーの構成やおもしろさに，子どもたちが自然と気付かされると考えた。

2．2．主人公にインタビュー～場面の移り変わりを考えたり，主人公に寄り添ったりして読む～

人物の視点に立って読めるようにする手立てとして，作品に対する問い方を工夫することが考えられる。人物と事物，人物同士の関係を問うには，それらの視点をもった問いが必要である。その問いが，子どもから出てくるようになるようにしたい。自問自答しながら読むことで問いを見出し，集団に投げかけていくようにする。

そこで本実践では，主人公の視点に立ってストーリーを楽しむために，主人公にインタビューをするという学習活動を行った。主人公へのインタビューで，その場面の様子をとらえ，場面の移り変わりを考えたり，主人公の思いや様子に寄り添って読もうとしたりする姿をねらいとした。

また，自分が考えた質問に，グループの仲間同士でも答えるようにする。同じ文章のところから違う問いをもっていたり，違う答えを導き出したりするということから，他者とのつながりによって自らの読みを広げたり深めたりする姿を見出したいと考えた。

2．3．「読むために書く」を設定した単元構成

第２次，第３次に，読むために書く活動を入れた単元構成とした。ここで言う書く活動とは，主に主人公へのインタビューとその答えである。

第１次　ファンタジー作品を読もう

①「もうすぐ雨に」の範読を聞き，初発の感想を書く。
②「めっきらもっきらどおんどん」の範読を聞き，感想を書く。
③２作品の共通点について話し合い，物語の構成（現実→非現実→現実）を学習する。物語の主人公にインタビューするという見通しを立てる。

第２次　「もうすぐ雨に」の世界に入ろう

④主人公にインタビューしたいことを書く。
⑤考えた質問をグループで交流し，不思議な出来事（動物の言葉が分かる）に関係する質問を選ぶ。
⑥各グループで話し合っていた質問への答えについてみんなで話し合う。

第３次　「めっきらもっきらどおんどん」の世界に入ろう

⑦主人公にインタビューしたいことを書く。ペアの子どもに主人公になって答えてもらう。
⑧学習全体を振り返って感想を書く。

3．授業の実際

3．1．第１時「もうすぐ雨に」の範読を聞き，初発の感想を書く。

子どもたちの初発の感想を以下にまとめる。

○主人公「ぼく」が動物と話せることに関して
・助けたかえるが，動物と話せるようにしたのか。
・動物と話せていいな。
・男の子は，かえるを助けてよかったと思っていると思う。（おかげで動物と話せたから。）
・雨で，動物の言葉が分からなくなったのかな。まほうか何かが切れたのかな。
・声が聞こえるのは，雨がふるまでだったのかな。
・また動物を助けたら聞こえるかも。（ぼくも帰りに助けてみよう）
・自分たちも，動物を助けたら聞こえるかも。

○その他主人公「ぼく」に関して
・ちゃんとしている子。からすに「ちらかしたら，だめだよ」と，ちゃんと言ってあげている。
・男の子はやさしい。トラノスケの体をごしごしふいてやったから。

○トラノスケに関して
・最後にトラノスケは何て言ったのかな。
→・「ありがとう」
→・「やっぱり雨がふったでしょ」

○動物に関して
・ほとんどの動物が話せてすごい。
・かえるたちが楽しそう。

ほとんどが，主人公が動物の言葉が分かったことに関連したものである。しかし，動物の言葉が分かったきっかけや分からなくなったことに関して触れている子どもは少ない。

さらに，非現実世界を抜けた後にも，「ぼく」はトラノスケの言葉が分かったと言っており，現実に戻ってもなお非現実での出来事が影響している。このことがファンタジー作品としての余韻を残すのであるが，子どもたちの感想には，作品の最後に触れたものはなかった。

つまり，この時点では，作中の非現実世界に目を向け，主人公に同化して，不思議体験を楽しもうとする声が多いということである。

3．2．第３時　２作品の共通点について話し合い，物語の構成（現実→非現実→現実）を学習する。

「もうすぐ雨に」を読んだ子どもたちに，副教材である「めっきらもっきらどおんどん」を紹介し，本文を渡して読み聞かせた。

その後，主に次のような感想について話し合った。

・主人公のかんたが歌ったでたらめな歌をお化けが気に入ったことがきっかけとなって，ふしぎの世界へ行ったこと。
・「おかあさん」と叫んだことで元の世界に戻ったこと。
・歌を忘れたため，お化けの世界に行けなくなってしまったこと。
・おばけもかんたも，遊べなくなったことを残念がっていること。

「もうすぐ雨に」の初発の感想と同じく，主人公がおばけと一緒に遊んでいる楽しさについて話し合われるかと思っていたが，予想とは異なっていた。ファンタジー作品の不思議さに着目した意見が多かったのである。それは，「もうすぐ雨に」という作品を前日に読んでいたからかもしれないし，範読前に教師が「２つの作品は似ている」と言ったからかもしれない。いずれにせよ，ファンタジー作品としての特徴をとらえて読もうとしているようであった。

「めっきらもっきらどおんどん」と「もうすぐ雨に」の似ている所として挙げられたのは，次の通りである。

①動物と話せたことと，かんたがあなにすいこまれておばけと遊んだことが，どちらもまほうみたいなことだった。
②かえるを助けるとふしぎなことが起こったことと，お化けがかんたの歌を気に入ったらふしぎな所に行ったということ。
③最後に，チリンと鳴らなくなったことと，あの歌を思い出せなくなったということ。(ふしぎなことが，もう起きなくなった)
④文にダッシュ（―）がある。

①②については，不思議なことの起こる物語であることと，そのきっかけについて話し合った。

③について，この感想を書いた子どもは，２つともふしぎなことは起きるが，場所は変わる・変わらないという違いがあると指摘した。そこで，「ファンタジー」という用語を提示し，物語の作りが，現実→ふしぎの世界（体験）→現実，となっていることを共有した。ファンタジーという用語を辞書で調べると「空想」と書かれており，一人の子どもが「空想は，頭の中で想像すること」と自分の言葉で説明した。

そして，初発の感想の中から「○○のことを主人公に聞いてみたい」と書かれていたものを取り上げ，他にも聞いてみたいことはないか考えてみようと投げかけた。

そこで，「目を閉じて想像してみよう」「“どこでもドア”（※）で話の世界に入ろう」という子どもの発想から，「自分の心の中で“どこでもドア”を開いて物語の世界に入ろう」というめあてを立てた。

(※) ワークシートの呼び名。「不思議の世界に入り込める扉」という意味をこめて子どもたちが名づけた。

また，ある子どもが，「そもそも，男の子が主人公なのかな。動物が主人公なのかも」とつぶやいたことから，現実からふしぎな世界へ入って，元の世界に戻る人物が主人公であることを確認した。

④については，「もうすぐ雨に」を読んだときにも気付きとして出されたことで，ダッシュの中には話し手が何か考えていることがありそうだということを改めて押さえた。

３．３．第６時「各グループで話し合った質問への答えについて話し合う。」

（　）つぶやき，＜＞行動

美優と華が二人で話し合ったインタビューを聞く場面である

図１　考えた質問をインタビューする姿

美優・華：どうしてトラノスケが，なんて言ったのか分かったのですか。
教師：＜吹き出しに板書＞
（C：何となく分かりました）
教師：なんてインタビューしてくれたかな。先生この後なんて書いたらいいのか，うっかり忘れちゃった。
大：どうしてトラノスケの言いたいことが分かったのですか。
C(合ってます。)
教師：そうインタビューしてるんやけど，ぼくはなんと答えるだろう。聞いてみようか。
C(どうしてトラノスケの言いたいことが分かったんですか。)
理緒：動物の言葉がだんだん聞き取れて，本当はトラノスケがなんて言ってるか，不思議の世界の動物の声が分からんかったら，最後のトラノスケの言葉がわからんかったと思う。それがわかるのは，動物の声をたくさん聞いたから，だんだんわかるようになったからです。
教師：たくさんお話してくれたね。どういうことか伝わったかな。
C：（ううん。）
教師：理緒ちゃんのお話の中で「だんだんと」って出

てた。だんだんとって，どこのことかな。
理緒：トラノスケが話して，だんだん動物にいろいろ会って，だんだんとわかるようになった。
C(ああ，そういうこと)
T：理緒ちゃんが言ったことが分かるように，だんだんとのところをインタビューしてみよう。

理緒は，初発の段階から，「ぼく」が動物の言葉が分かるようになった境目について考えていた。理緒の発言の「だんだんと」という言葉を取り上げて理緒の考えを共有することで，「チリン」という音に着目することにつながり，非現実の入り口と出口について考えることができると考えた。授業ではこの後，チリンという音がどこで聞こえているかを見つける場面が訪れた。

4．授業の考察

初発の感想から，気付いていること，気が付いていないことをもとに，第２次を展開した。これは，国語科の授業を作る上での基礎である。感想文については，教師がまとめ，印刷して配布し，全員で互いの考えを共有した。その印刷物を読み，共感できるところや自分とは異なる考えに印をつけたり，グループで話し合ったりした。そうして，子どものもつ感想に，教師も子ども同士も耳を傾けられるようにした。

インタビューをする活動において，子どもたちは，「質問」を考えながら，実は，「主人公はこう答えるだろう」と自分なりの答えを考えることになる。それが，この活動のねらいでもある。実際に，教材文を読みながら自問自答している姿が見られた。

「もうすぐ雨に」では，主人公は動物の声が聞こえるようになるが，そのときにはいつもチリンという音が鳴る。「ぼく」は，そのことに気が付いているが，１回，２回，３回と起きる度に，主人公はだんだんと，自分に起きている不思議なことに気が付いていく。子どもたちは，主人公にインタビューするという活動を通しての話し合いにより，最初のチリンを聞いたときと，最後のチリンを聞いたときには，主人公の受け止め方が変わってきているということについて話し合うことができた。

この学習活動を行う前提として，質問には，「はい」「いいえ」で答えられるものと，そうでないものがあり，後者の方がよりくわしい話を聞くことができる（前者は，返答によって質問を重ねなければならない）ということを，子どもたちが理解しておく必要がある。しかし，その理解が不十分な子どももいた。本単元でのインタビュー活動による学習の際，もしくはそれ以前の学習で，共通理解を図っておくべきであった。

5．成果と課題

子どもたちが主教材と副教材の２作品を読んで話し合ったことは，主に次の３点である。①動物と話せたことと，かんたがあなにすいこまれておばけと遊んだことが，どちらも魔法みたい。②かえるを助けると不思議なことが起こったことと，おばけが主人公の歌を気に入ったら不思議な所に行ったこと。③最後に，チリンとならなくなったことと，あの歌を思い出せなくなったこと。ふしぎなことが，もう起きなくなった。

２つの作品の読みやすさや共通点から，「もうすぐ雨に」だけでは気付きにくかったこと（現実，非現実，現実という作品構成，不思議の世界にいく合図や合言葉があることなど）に，子どもたちは自然と気付くことができた。

「めっきらもっきらどおんどん」と比べて読むことで，子どもたちはファンタジーの構成に自然と気付くことができるなど，重ね読みによる一定の効果が見られたと言える。

しかし，その効果は第１次におけるものであり，第３次に再び用いることによる効果の有意性は見られなかった。

主人公にインタビューをするという「読むために書く」活動は，子どもたちにとって「楽しんで書く」という点においては評価できるであろう。さらに，「質問」を考えながら，実は，「主人公はこう答えるだろう」と自分なりの答えを考えることにもつながっており，物語の登場人物の気持ちに寄り添った読みをすることにもつながった。

しかし，書くために共有しておくべきことを押さえることや，何らかの視点をもってインタビューすることを考えるようにするなど，書く際の指導においては改善が必要である。また，叙述に戻って考えるために，精選された本文の一部を視写するといった活動を取り入れることも検討していかなければならない。そうでなければ，子どもが何を根拠に質問ー応答を書いているのかが明確にならないのではないだろうか。

子どもが読むための力を獲得していける学習にし，かつ子どもが抵抗なく，進んで読んだり書いたりしていけるよう，「読む」と「書く」を関わらせた単元学習を今後の研究対象としたい。

参考文献

世羅博昭(2004)「国語科授業構築の原理と方法」野地潤家，倉沢栄吉『朝倉国語教育講座〈5〉授業と学力評価』朝倉書店

世羅博昭編著(2005)「6年間の国語能力表を生かした国語科の授業づくり」日本標準

長谷川摂子作，ふりやなな絵(1990)「めっきらもっきらどおんどん」福音館書店